

1. 災害時ネットワーク構築と生活継続の仕組みづくり

認定NPO法人災害福祉地域支援ネットワーク・サンダーバード代表理事 小山剛

1 サンダーバードのスタート時の理念

災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバードは、災害時の支援ネットワークといいうイメージがあるが、災害前に限らず、普段から介護・支援が必要な人に「快速な生活を送ってもらいたい」という考え方を基本にスタートしている。地震に遭ったから普通の生活を継続できないと思っている人が多いが、「災害と介護はリンクしない」というのが私の持論である。つまり、地震のような自然災害が起きようが起きまいが、介護・支援が必要であっても普通の生活を継続できない人はいるということである。

例えば、離れて住む親が倒れたときに、あなたはどうするのか。仕事を辞めて放飯に戻るのか。それは無理なのではないだろうか。そうすると、放飯の親は誰が看るのか。その地域に介護が必要となった人を扶助する仕組みがないなら、災害と対応は同じである。あなたの親は避難所にある施設に入らなければ生き残るまで過ごすことになる。このよう人が普段の生活を継続できなくなる何らかの問題が起きることは「災害」であり、私はこれを「介護災害」と呼んでいる。震度のときは「災害」に遭ったら昨日と同じ生活ができるくなる。それと同じではないだろうか。

自然災害は、税金を投入したり、みんなが賃金を募ったとして、元の生活に戻すための支援をするにかかるわざ。介護の世界では、避難所である施設に入ったままにすることにして何の問題もないではない。

なぜ、介護が必要になって施設に入られた人は家に戻れないのだろう。なぜ、病院に入れられた人は亡くなるまで外出られないのだろう。私はそれをいつも疑問に思っている。私自身もそうなりたくない。だからこそ、平常時に介護が必要となるたがり普段の生活を近いところで続けられる状態をくらうべきではないと考える。仮に一時に避難する状態をつくったとしても、早く元に戻さないといけない。そういう仕組みをつくろうとして動いていた。その矢先に新潟県中越地震（2004年平成16）

年10月23日)が発生し、多くの人々が被災してしまったのである。

2 仮設住宅の中にサポートセンターをつくる

新潟県中越地震の被災者のため、私は、仮設住宅の中にサポートセンターという生活保障の拠点をつくりました。その原点は24時間365日フルタイムのサービスの提供である。なぜ仮設住宅の中につくったかというと、一番大きな仮設住宅には1200人が生活していた。1200人は一つの町の規模に相当するから、そこで介護が受けられないと別の場所に移動しなければならなくなる。一時避難場所である体育馆は、1~2週間で終わり、次は仮設住宅の段階に入る。これが基本的には2年間、この段階で中長期的なサービスを提供する仕組みをつくるおかないと、そこから移動しなければならない人が出でることが予想される。

災害前にその仕組みづくりをすでにしていたか、災害時にも同じ仕組みを構築できた。仮設での接遇の仕組みは制度でも何でもない。みんなで「こうこう」と言いつて自費でつくった。運営経費もすべて自費だ。今までたくさんの人の生活を守り、生活をもとに戻す仕組みをつくりましたからね。仮設住宅の中にサポートセンターをつくることは当然であった。

このようにして生まれたサポートセンター千歳は、視察した参加者の中から「この仕組みを全国的に広げたい」という声が高まり、その願いを実現するためにサンダーバードを立ち上げた(図表1)。サンダーバードをつくってからサービスができるのではないか。

